

鼻炎用内服薬

製品群No. 69

ワークシートNo.42

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)			F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化		
評価の視点		併用禁忌(他 剤との併用) により重大な問 題が発生する おそれ	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量に上 限があるもの	過量使用・誤 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ			
抗ヒスタミン成分	塩酸ジフェニルピラリン 注	抗ヒスタミン作用及び抗アセチルコリン作用		中枢神経抑制剤・アルコール・モノアミン酸化酵素阻害剤(相互に作用を増強)	ショック、アナフィラキシー様症状(頻度不明)	0.1~5%未満(眠気、頭痛、頻度不明(排原因難、めまい、けん怠感、神経過敏、口渇、悪心・嘔吐、下痢、便秘、喀痰嚔出困難)、自動車運転等危険を伴う機械の操作)	頻度不明(過敏症)		本剤の成分過敏症の既往歴のある患者、結内腫(眼圧を上昇)、前立腺肥大等下部尿路に閉塞性疾患(排原因難、尿閉等)	高齢者、妊婦又は妊婦している可能性のある婦人					通常成人1回1~2管(塩酸ジフェニルピラリンとして2~4mg)を1日1~2回皮下又は筋肉内注射する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	皮膚疾患に伴うそう痒(湿疹・皮膚炎、皮膚そう痒症、小児ストロフルス、薬疹、中毒疹)、じん麻疹、アレルギー性鼻炎、感冒等上気道炎に伴うくしゃみ・鼻汁・咳嗽	
	α-マレイン酸カルボキシラミン	なし															
	α-マレイン酸クロルフェニラミン	ボララミン錠 2mg	抗ヒスタミン作用	中枢神経抑制剤・アルコール・MAO阻害剤・抗コリン作用を有する薬剤(相互に作用を増強)、ドロキドパ、ノルエピネフリン(血圧の異常上昇)	ショック(頻度不明)	5%以上又は頻度不明(鎮静、神経過敏、頭痛、無尿、悪心、嘔吐、めまい、耳鳴、前庭障害、多幸症、情緒不安、ヒステリー、振戦、神経炎、協調異常、感覚異常、構視、口渇、胸やけ、食欲不振、悪心、嘔吐、腹痛、便秘、下痢、頻尿、排尿困難、尿閉等低血圧、心悸亢進、頻脈、期外収縮、鼻及び気道の乾燥、気管分泌液の粘性化、喘鳴、鼻閉、溶血性貧血、肝機能障害(AST(GOT)・ALT(GPT)・Al-Pの上昇等)、悪寒、発汗異常、疲労感、胸痛、月経異常、0.1%未満(血小板減少)、眠気を	5%以上又は頻度不明(過敏症)	本剤の成分又は類似化合物に対し過敏症の既往歴、結内腫(結内腫の増悪)、前立腺肥大等下部尿路に閉塞性疾患(症状の増悪)、低出生体重児・新生児(虚脱等の重篤な反応があらわれるおそれ)	眼内圧亢進、甲状腺機能亢進症、狭心性消化性潰瘍、幽門十二指腸通過障害、循環器系疾患、高血圧症、高齢者、妊婦又は妊婦している可能性のある婦人					α-マレイン酸クロルフェニラミンとして、通常、成人には1回2mgを1日1~4回経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	じん麻疹、血管運動性浮腫、枯草熱、皮膚疾患に伴うそう痒(湿疹・皮膚炎、皮膚そう痒症、薬疹)、アレルギー性鼻炎、感冒等上気道炎に伴うくしゃみ・鼻汁・咳嗽。		

鼻炎用内服薬

製品群No. 69

ワークシートNo.42

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果		
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	
		併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が発生 するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの								
							権することがあ るので自動 車の運転等 危険を伴う機 械の操作								
抗 ヒス タミ ン 成分	メキタジン ゼスラン錠	ケミカルメディ エーター拮抗 作用、抗ヒス タミン作用、 抗アレルギー 作用		中枢神経抑制剤・アルコール(眠気)、抗うつ剤・MAO阻 害剤・アトロピン様作用を有 する薬剤(口渇、排尿困難)、 メキキサレン(光線過敏症)	肝機能障害・ 黄疸・血小板 減少(頻度不 明)	ショック、アナ フィラキシー 様症状(頻度 不明)	0.1~5.9%未 満(眠気、け ん怠感、ふら ふら感、口 渇、胃部不 快感)、0.1%未 満(AST (GOT)、ALT (GPT)の上 昇、血小板減 少、頭痛、め まい、下痢、 便秘、食欲不 振、嘔吐、胃 痛、腰痛、胸 部苦悶感、心 悸亢進、排尿 困難、咽頭 痛、浮腫、顔 面潮紅、視 筋障害、月経 異常、味覚異 常、口内しび れ感)、頻度 不明(黄疸)、 自動車の運 転等危険を 伴う機械の 操作。	0.1%未満(過 敏症)	本剤の成分、フェ ノチアジン系化 合物及びその類似化 合物に対し過敏症 の既往歴、緑内障 (緑内障を悪化)、 前立腺肥大等下 部尿路に閉塞性 疾患(排尿困難等)	腎障害、高齢者、 妊婦又は妊娠して いる可能性のある 婦人、授乳婦、低 出生体重児、新生 児、乳児、幼児又 は小児		過量投与で眼 炎、悪心、嘔吐、 軽度の抗コリン 作用性障害	他のフェノチ アジン系化合 物・長期投与 又は大量投 与により角 膜・水晶体の 混濁、網膜・ 角膜の色 沈着	1.通常成人1回メキタジン として6mgを1日2回経口 投与する。なお、年齢、症 状に応じて適宜増減する。 2.通常成人1回メキタジン として3mgを1日2回経口 投与する。なお、年齢、症 状に応じて適宜増減する。	1.気管支喘 息、2アレルギー 性鼻炎、じん 麻疹、皮膚 疾患に伴うそ う痒(湿疹・皮膚 炎、皮膚そう 痒症)
血 管 収 縮 成分	塩酸ブソド エフェドリン	なし													

鼻炎用内服薬

製品群No. 69

ワークシートNo.42

リスクの程度 の評価		A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化				
評価の視点		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象 の症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果
			併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が 発生するおそれ)		薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			用量による 過度使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ		
	ヨウ化インブ ロバミド	なし												
消炎酵素成分	塩化リゾチム	レフトゼ錠	抗炎症作用: 痙攣形成・組織 修復作用: 黏液の分解と排出作用: 出血抑制作用		ショック、アナ フィラキシー様 症状・Sjögren 症候群・Lyell 症候群(頻度 不明)		0.1~5%未 満(下痢、胃 部不快感、悪 心・嘔吐、食 欲不振)、 0.1%未満(口 内炎等)、頻 度不明肝機 能障害 (AST(GOT)、 ALT(GPT)、 Al-P、γ-G TP、LDHの 上昇等、めま い)	0.1%未満(過 敏症)				作用機序は 解明されてい ない点も多 く、用量・効 果の関係も 必ずしも明 かにされてい ないので、濫 然と投与しな い。	1.慢性副鼻腔炎の腫脹の 融解、痰の切れが悪く、喀 出回数が多い気管支炎、 気管支喘息、気管支拡張 症の喀痰喀出困難、小 手術時の術中術後出血の 場合、通常、成人は1日塩化 リゾチムとして、60~ 270mg(力価)を3回に分 けて経口投与する。2.歯 槽膿漏症(炎症型)腫脹の 融解の場合、通常、成人 は1日塩化リゾチムとし て、180~270mg(力価) を3回に分けて経口投与 する。高齢者減量	1.慢性副鼻腔炎の腫脹の 融解、痰の切れが悪く、喀 出回数が多い気管支炎、 気管支喘息、気管支拡張 症の喀痰喀出困難、小 手術時の術中術後出血(歯 科、泌尿器科 2.歯槽膿漏症(炎症型)腫 脹の融解の場合
消炎酵素成分	セラペプター ゼ	ダーゼン5 mg錠	・抗炎症作用 ・喀痰・胆汁 の融解・排泄 促進作用	抗凝血剤(抗凝血剤の作用 が増強)	間質性肺炎、 PIE症候群、 AST(GOT)、 ALT(GPT)の上 昇等を伴う肝 機能障害、黄 疸(0.1%未 満)	皮膚粘膜炎 症候群(Stev ens-John son症候群) 及び中毒性 表皮壊死症 (Lyell症候 群)、ショック 、アナフィラ キシー様症 状(0.1%未 満)	0.1~5% 未満(食欲不 振、胃部不快 感、悪心、嘔 吐)、0.1% 未満(下痢、 鼻出血、血 絞等の出血傾 向)	0.1~5% 未満(過敏症)	本剤の成分過敏 症の既往歴	薬物過敏症の既往 歴、血液凝固異 常、重篤な肝障害 又は腎障害		作用機序は 解明されてい ない点も多 く、用量・効 果の関係も 必ずしも明 かにされてい ないので、濫 然と投与しな い。	セラペプターゼとして、通 常成人1日15~30mgを 1日3回に分けて毎食後 に経口投与する。なお、年 齢・症状に応じて適宜増減 する。製剤別の通常成人 用法・用量は次のとおり である。 ◇ダーゼン5mg錠:1回1 ~2錠錠、1日3回毎食後 に経口投与 ◇ダーゼン10mg錠:1回 1錠錠、1日3回毎食後 に経口投与 ◇ダーゼン顆粒1%:1回 0.5~1g錠、1日3回毎 食後に経口投与 本剤の体内での作用機序 はなお解明されていない 点も多く、また、用量・効 果の関係も必ずしも明 かにされていない。従 って濫然と投与すべ きでない。	・手術後及び 外傷後、慢性 副鼻腔炎、乳 汁うっ滞(乳房 マッサージ及 び搾乳を行っ ている場合)の 症状の腫脹の 融解 ・気管支炎、肺 結核、気管支 喘息時の喀痰 喀出困難 ・麻酔後の喀 痰喀出困難
抗炎症成分	グリチルリチ ン酸二カリウ ム	点眼のみな ので、グリチ ルリチン酸 モノアンモニ ウム、グリチ ロン注一号 を使用	抗炎症作用	ループ利尿剤・チアジド系お よびその類似利尿剤 (低カリウム血症)、甘草(偽 アルドステロン症)	偽アルドステ ロン症(頻度 不明)、横紋 筋融解症(グ リチルリチン 酸または甘 草を含有する 製剤)				偽アルドステロ ン症、ミオパシー、低 カリウム血症(低カ リウム血症、高血 圧症等を悪化)	高齢者、妊婦小児 等		長期運用に より偽アルド ステロン症	グリチルリチンとして、通 常成人1日1回40mgを皮下 注射する。なお、年齢・症 状により適宜増減する。	薬疹

鼻炎用点鼻薬

製品群No. 70

ワークシートNo.43

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 薬用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の悪化	I スイッチ化等に伴う使用環境の変化	J 用法用量	K 効能効果	
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ			適応禁忌	慎重投与	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を願うおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)					過量使用・誤使用のおそれ
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を願うおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ	用法用量	効能効果		
血管収縮成分	塩酸テトラヒドロソリン ABCスプレー点鼻薬、塩酸塩がなく、硝酸塩を使用	直接局所粘膜炎に適用すれば粘膜の充血、腫脹を除去する。	モノアミン酸化酵素阻害剤(急激な血圧上昇)						頻度不明(結膜、頭痛、めまい、悪戦、不眠症、脱力感、血圧上昇、心悸亢進、不整脈、熱感、刺刺痛、乾燥感、反応性充血、鼻漏、長期使用で反応性の低下等)	頻度不明(過敏症)								本剤は原則として6歳以上の小児及び成人に用いる。通常、成人3～5時間毎に2～3回鼻腔内に噴霧するか、又は2～4滴を鼻腔内に点鼻する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	上気道の諸疾患の充血・うっ血
	塩酸ナファゾリン	0.05%ブリンナ液「チバ」、塩酸ナファゾリンの配合剤しかなかったため、硝酸ナファゾリンの点鼻薬を用いた	血管平滑筋のα-アドレナリン受容体に直接作用して血管を収縮させる。アドレナリンより強い末梢血管収縮作用を有し、作用持続時間も長い(ウサギ耳殻血管)。	MAO阻害薬(急激な血圧上昇)					頻度不明(眼気等の鎮静作用(特に小児)、神経過敏、頭痛、めまい、不眠症、血圧上昇、悪心・嘔吐、熱感、刺刺痛、乾燥感、嗅覚消失、反応性充血、長期投与で顆粒球減少・反応性の低下)	頻度不明(過敏症)	本剤の成分に対し過敏症の既往歴、2歳未満の乳・幼児(ショック)、MAO阻害剤の投与を受けている(急激な血圧上昇)	冠動脈疾患、高血圧症、甲状腺機能亢進症、糖尿病、交感神経作用薬による不眠、めまいなどの既往、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、小児	運用品又は頻回使用により反応性の低下や局所粘膜の二次充血を起こすことであるので、急性充血期に陥って使用するか又は適切な休業期間において使用すること。	眼科用として使用しないこと。過量投与により、主全身作用として、血圧上昇と二次作用として臓器虚血がみられる。幼・小児では過量投与により、顕著な鎮静があらわれ、発汗、徐脈、昏睡等の全身症状があらわれやすい。運用・頻回投与により顆粒球減少、反応性の低下、局所粘膜の二次充血を起こすことがある。	通常、成人鼻腔内には、1回2～4滴を1日数回、咽頭・喉頭には1回1～2mLを1日数回塗布又は噴霧する。なお、年齢、症状により適宜増減する。局所麻酔剤への添加には、局所麻酔剤1mLあたり0.05%液2～4滴の割合で添加する。	上気道の諸疾患の充血・うっ血、上気道粘膜の表面麻酔剤における局所麻酔剤の効力持続時間の延長			
	塩酸フェニレフリン	ネオシネジンコーワ5%点眼液、点鼻薬がなく点眼薬を使用	塩酸フェニレフリンは選択的α1受容体刺激作用薬である。健康成人における散瞳は迅速であり、また、通常5～6時間で正常に復す。	MAO阻害薬(急激な血圧上昇)、三環系抗うつ薬(急激な血圧上昇)、シクロプロパン、ハロタンなどで全身麻酔する前には、本剤の投与を休止する					頻度不明(結膜炎、眼圧上昇、血圧上昇)自動車の運転等危険を伴う機械の操作には従事させない。	頻度不明(過敏症)	狭隅角や前房が浅いなどの眼圧上昇の素因(急性閉塞隅角緑内障の発作)	高血圧症、動脈硬化症、冠不全または心不全などの心臓疾患、糖尿病または甲状腺機能亢進症、小児、高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人			長期にわたる散瞳は虹彩が癒着するという報告がある(点眼の注意)	通常1回、1～2滴宛点眼する。	診断または治療を目的とする散瞳		
抗ヒスタミン成分	塩酸イプロヘプテン	なし																	
	マレイン酸クロルフェニラミン	外用の添付文書無し																	

鼻炎用点鼻薬

製品群No. 70

ワークシートNo.43

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重要な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 薬用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく留意性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を断るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				スイッチ化等に伴う使用環境の変化
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					使用量(誤使用のおそれ)	過量使用・誤使用による健康被害のおそれ			
抗アレルギー成分	クロモグリク酸ナトリウム	インターール点鼻液				アナフィラキシー様症状(0.1%未満)	0.1~5%未満(鼻内刺激感)0.1%未満(鼻出血、頭痛)	0.1%未満(過敏症)		本剤の成分に対し過敏症の既往歴	妊婦又は妊娠している可能性のある婦人			噴霧吸入させること。内服しても効果は得られない		1日6回(起床時、日中約3時間ごとに4回、就寝前)、1回各鼻腔に1噴霧(クロモグリク酸ナトリウムとして2.8mg)ずつ噴霧吸入する。症状の緩解が得られれば、その後の経過を観察しながら減量すること。	アレルギー性鼻炎
殺菌成分	塩化ベンザルコニウム	0.1w/vvチアミトール水						頻度不明(過敏症)		粘膜、創傷面または炎症部位に長期間または広範囲に使用しないこと			・原液は皮膚・粘膜に付着及び眼に入らないように注意する(刺激性がある)。・炎症または弱刺激性の部位(粘膜、陰股部等)への使用。正常の部位への使用より低濃度とすることが望ましい。また、使用後は滅菌精製水で水洗する。・深い創傷または眼に使用する希釈水溶液は、調製後滅菌処理すること。・経口投与しないこと。洗腸には使用しないこと。・密封包帯、ギプス包帯、パッドに使用すると刺激症状があらわれることがあるので、使用しないことが望ましい。	・粘膜、創傷面または炎症部位に長期間または広範囲に使用しないこと(全身吸収による筋脱力がある)。	効能・効果:用法・用量(塩化ベンザルコニウム濃度)①手指・皮膚の消毒:通常石けんで十分に洗浄し、水で石けん分を十分に洗い落とし、塩化ベンザルコニウム0.05~0.1%溶液に浸して洗い、滅菌ガーゼあるいは布片で拭拭する。術前の手洗の場合には、5~10分間ブラッシングする。②手術部位(手術野)の皮膚の消毒:手術前局所皮膚面を塩化ベンザルコニウム0.1%溶液で約5分間洗い、その後塩化ベンザルコニウム0.2%溶液を塗布する。③手術部位(手術野)の粘膜の消毒:塩化ベンザルコニウム0.01~0.025%溶液を用いる。④感染皮膚面の消毒:塩化ベンザルコニウム0.01%溶液を用いる。⑤医療用具の消毒:塩化ベンザルコニウム0.1%溶液に10分間浸漬するか、または厳密に消毒する際は、器具を予め2%炭酸ナトリウム水溶液で洗い、その後塩化ベンザルコニウム0.1%溶液中で15分間煮沸する。⑥手術室・病室・家具・器具・物品などの消毒:塩化ベンザルコニウム0.05~0.1%溶液を布片で塗布・拭拭するか、または噴霧する。⑦履洗浄塩化ベンザルコニウム0.02		

鼻炎用点鼻薬

製品群No. 70

ワークシートNo.43

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	機能効果
	薬理作用	相互作用	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化		
						薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの						特異体質・アレルギー等によるもの					
																	~0.05%溶液を用いる。⑧結膜囊の洗浄・消毒 塩化ベンザルコニウム0.01~0.05%溶液を用いる。・炎症または易刺激性の部位(粘膜、陰股部等)への使用:正常の部位への使用より低濃度とすることが望ましい		

鼻炎用点鼻薬

製品群No. 70

ワークシートNo.43

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化		
	評価の視点	薬理作用	相互作用	併用注意	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応薬感	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上 限があるもの のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果
殺菌成分	塩化ベンゼ ニウム	ハイアミン 液、塩化ベ ンゼニウム 10w/v%	芽胞のない細菌、真菌類に広く抗菌性を有し、グラム陽性菌よりは陰性菌よりも低濃度で効果を示す。一方、結核菌及び大部分のウイルスに対する殺菌効果は期待できない					頻度不明(過敏症)					原液は皮膚・粘膜に付着及び眼に入らないように注意する。・炎症または易刺激性の部位(粘膜、陰股部等)への使用時は低濃度・経口投与しないこと。・密封包装、ギブス包装、パックに使用すると刺激症状があらわれることがあるので、使用しないことが望ましい。・深い創傷又は眼にしようする場合は希釈液は注射用蒸留水か滅菌精製水を使用	全身吸収による筋脱力をおこすおそれがあるので、粘膜、創傷部位に長期又は広範囲に使用しない。		①通常石けんで十分に洗浄し、水で石けん分を十分に洗い落した後、塩化ベンゼニウム0.05～0.1%溶液(本剤の100～200倍希釈液)に浸して洗い、滅菌ガーゼあるいは布片で清拭する。術前の手洗の場合には、5～10分間ブラッシングする②手術前局所皮膚面を、塩化ベンゼニウム0.1%溶液(本剤の100倍希釈液)で約5分間洗い、その後塩化ベンゼニウム0.2%溶液(本剤の50倍希釈液)を塗布する③塩化ベンゼニウム0.01～0.025%溶液(本剤の400～1,000倍希釈液)を用いる④塩化ベンゼニウム0.01%溶液(本剤の1,000倍希釈液)を用いる⑤塩化ベンゼニウム0.025%溶液(本剤の400倍希釈液)を用いる⑥塩化ベンゼニウム0.02%溶液(本剤の500倍希釈液)を用いる⑦塩化ベンゼニウム0.1%溶液(本剤の100倍希釈液)に10分間浸漬するか、または厳密に消毒する際には、器具を予め2%炭酸ナトリウム水溶液で洗い、その後塩化ベンゼニウム0.1%溶液(本剤の100倍希釈液)中で15分間煮沸する⑧塩化ベンゼニウム0.05～0.2%溶液(本剤の50～200倍希釈液)を布片で塗布・清拭するか、または噴霧する	①手指・皮膚の消毒②手術部位(手術野)の皮膚の消毒③手術部位(手術野)の粘膜・粘膜炎の消毒④感染皮膚面の消毒⑤整容の洗浄・消毒⑥医療用具の消毒⑦手術室・病室・家具・器具・物品などの消毒
抗炎症成分	グリチルリチン酸二カリウム	ノイボルミン 点鼻薬がなかったため、点眼薬の添付文書を使用	抗アレルギー作用、角膜上皮再生促進作用を有する					頻度不明(眼の刺激感) 頻度不明(過敏症)					点眼用のみ使用		通常、1回2～3滴を1日5～6回点眼する。なお、症状により適宜増減する。	アレルギー性結膜炎	

点耳薬

製品群No. 71

ワークシートNo.44

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化						
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果		
		併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量以上 過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ				
フェノール	フェノール	本剤は、使用 濃度において グラム陽性 菌、グラム陰 性菌、結核菌 には有効であ るが、芽胞 (炭疽菌、破 傷菌等)及び 大部分の ウイルスに対 する効果は期 待できない。					頻度不明(過 敏症)		・損傷皮膚及び粘 膜(吸収され中 毒症発現)		・原液または濃 厚液が皮膚に付 着した場合には 腐蝕及び吸収さ れ、中毒症状を 起こすことがあ る。 ・眼に入らないよ うに注意すること。 ・本剤は必ず希 釈し、濃度に注 意して使用する こと。 ・炎症または局 刺激性の部位に 使用する場合は 、濃度に注意 して正常の部位 に使用するよりも 低濃度とすること が望ましい。 ・外用にのみ使 用すること。 ・密封包装、ギブ ス包装、パックに 使用すると刺激 症状及び吸収さ れ、中毒症状が あらわれるおそ れがあるので、 使用しないこと。 ・長期間または 広範囲に使用し ないこと。[吸収 され、中毒症状 を起こすおそれ がある。] ・鎮静を避けるた め、保管及び取 扱いには十分注 意すること。	長期間に使 用しないこ と。(吸収さ れ、中毒症状 の発現のお それ。)	効能・効果 用法・用量(本 品希釈倍数) ・手指・皮膚の消毒:フェ ノールとして1.5~2%溶液 を用いる。(50~67倍) ・医療用具、手術室・病室・ 家具・器具・物品などの消 毒:フェノールとして2~ 5%溶液を用いる。(20~ 50倍) 排泄物の消毒:フェノール として3~5%溶液を用い る。(20~33倍) 下記疾患の鎮痛 療養(小児ストロフルスを 含む)、じん麻疹、虫さされ 液: フェノールとして1~2%溶 液を用いる。(50~100倍) 軟膏:フェノールとして2~ 5%軟膏を用いる。(20~ 50倍)		
アミノ安息香 酸エチル	アミノ安息香 酸エチル「丸 石」(内用・ 外用)	胃粘膜の知 覚神経末梢 を麻痺させ、 中枢への刺 激伝達を遮 断して疼痛、 嘔吐を鎮め る。				0.1~5%(食 欲不振、悪 心、口渇、便 秘)、0.1%未 満(下痢)、メ トヘモグロビ ン血症(小 児)	頻度不明(過 敏症)		本剤過敏症既往 歴 乳幼児(内用・坐 剤の場合)		高齢者、妊婦又は 妊娠の可能性	(内用) 口内にしびれ等 を避さぬため 速やかに飲み下 す (外用) 眼には使用しな いこと[軟膏・液 剤の場合]、誤っ て吸入しないこ と[散布剤の場合]	長期連続投 与回避	(内用) 1日0.6~1g、3回分服。適 宜増減。高齢者は減量 (外用) 通常、5~15%の軟膏剤、 液剤、散布剤として、また は、1個中200mg~300mg を含有する坐剤として適宜 患部に使用する	(内用) 下記疾患に伴 う疼痛・嘔吐・ 胃炎、胃潰瘍 (外用) 下記疾患にお ける鎮痛・鎮 静・外傷、熱 傷、日焼け、皮 膚潰瘍、播種 症、痔疾

点耳薬

製品群No. 71

ワークシートNo.44

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 適用のおそれ	E 患者背景(既往症、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	I 用法用量	J 効能効果
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく留意性	適応禁忌		慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化等に伴う使用環境の変化					
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく留意性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果					
塩酸プロカイン	塩酸プロカイン注「ホエイ」 局所麻酔に類似のため使用	合成局所麻酔薬の原型であり、感覚・求心神経線維のNa ⁺ チャネルを遮断し、活動電位の伝導を抑制することにより局所麻酔作用を発現する。粘膜への浸透性が悪いので表面麻酔としては無効である。代謝産物が血管拡張作用を有し、速やかに吸収されるのでエピネフリンの添加が必要である。	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ) 併用注意	擬せん、痙れん等の中毒症状(頻度不明) ショック(頻度不明)	頻度不明(ねむけ、不安、興奮、霧視、めまい、悪心・嘔吐、メトヘモグロビン血症)	頻度不明(過敏症)	頻度不明(過敏症)	重篤な出血やショック状態(脊髄・硬膜外麻酔時、症状が悪化)、注射部位またはその周辺に炎症、脊髄・硬膜外麻酔時、効果が急激に発現、敗血症の患者(脊髄・硬膜外麻酔時、敗血症性の髄膜炎がおこるおそれ)、メトヘモグロビン血症(脊髄麻酔を除く) (症状が悪化するおそれ)、本剤または安麻毒エステル(コカインを除く)系局所麻酔薬に、対し過敏症の既往歴	高齢者、妊婦または妊娠している可能性のある婦人、妊娠末期の婦人	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ) 使用量に上限があるもの 過量使用・誤使用のおそれ 長期使用による健康被害のおそれ	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	使用に際し、目的濃度の水性注射液として使用する。 脊髄麻酔(硬膜外麻酔) 5~10%注射液とし、通常、成人には塩酸プロカインとして、低位麻酔には50~100mg、高位麻酔には150~200mgを使用する。 硬膜外麻酔 (基準最高用量:1回600mg)1.5~2%注射液とし、通常、成人には塩酸プロカインとして、200~400mgを使用する。 伝達麻酔 1~2%注射液とし、通常、成人には塩酸プロカインとして、10~400mgを使用する。 浸潤麻酔 (基準最高用量:1回1,000mg)0.25~0.5%注射液とし、通常、成人には塩酸プロカインとして、1回1,000mgの範囲内で使用する。 歯科領域麻酔 2%注射液にエピネフリンを添加したものをを用い、伝達麻酔、浸潤麻酔には、通常、成人には塩酸プロカインとして、10~100mgを使用する。 ただし、年齢、麻酔領域、部位、組織、症状、体質により適宜増減する。 必要に応じエピネフリン(通常濃度1:10万~20万)を添加して使用する。	脊髄麻酔(硬膜外麻酔)、伝達麻酔、歯科領域における伝達麻酔・浸潤麻酔			
アクリノール	アクリノール液	グラム陽性、陰性菌に有効で、特に連鎖球菌、ウェルシュ菌、ブドウ球菌、淋菌に対し、静菌及び殺菌作用がある。作用機序は、生体でアクリジニウムイオンとなり細胞の呼吸酵素を阻害するといわれている。			頻度不明(塗布部の疼痛、発赤、腫脹等潰瘍、壊死)	頻度不明(過敏症)						大量服用時には、悪心、嘔吐、腹痛、下痢、肝機能障害・外用にのみ使用し、内服しないこと		0.05~0.2w/v%の液として使用する。	化膿局所の消毒、泌尿器・産婦人科術中術後、化膿性疾患(せつ、よう、扁桃炎、副鼻腔炎、中耳炎)			
メントール	日本薬局方「メントール」「ミヤザワ」															芳香・除臭・猫味の目的で調剤に用いる		